

[ホーム](#)[防災気象情報](#)[気象統計情報](#)[気象等の知識](#)[気象庁について](#)[案内・申請・リンク](#)
[ホーム](#) > [気象等の知識](#) > [地震・津波](#) > [東海地震について](#) > 東海地震発生の切迫性

東海地震発生の切迫性

東海地震は、駿河湾から静岡県の内陸部を震源域とするマグニチュード8クラスの巨大地震で、その発生の切迫性が指摘されています。

その根拠として、過去にこの地域で発生した大地震の歴史が挙げられます。駿河湾内にある駿河トラフから四国沖にある南海トラフにかけてのプレート境界では、**過去100年から150年おきに岩盤がずれてマグニチュード8クラスの巨大地震が繰り返し起きていたことがわかっています**。しかし、前回の地震（東南海地震[1944年、マグニチュード7.9]、南海地震[1946年、マグニチュード8.0]）の際には南海トラフ沿いの岩盤だけがずれて、駿河トラフ沿いの岩盤だけがずれずに残ってしまいました。そのため、駿河トラフ周辺の部分の岩盤は150年以上もずれていないことになり、「東海地震はいつ起こってもおかしくない」と言われているのです。

また、駿河湾周辺の地殻のひずみの蓄積状況が測量などによって調べられており、**現在まで着実にひずみエネルギーが蓄え続けられていることが確かめられています(図2)**。すなわち、駿河湾周辺域は日本列島で最も地殻のひずみが蓄積された地域のひとつであり、このことがさらに東海地震の発生の切迫性を裏付けています。

- 東海地震に関する基礎知識
 - = [東海地震とは](#)
 - = 東海地震発生の切迫性
 - = [予測される震度や津波の高さ](#)
 - [東海地震の予知について](#)
- [東海地震に関連する情報](#)
 - = [情報の種類と流れ](#)
 - = [発表基準](#)
 - [過去の変遷](#)
- 地震防災対策強化地域判定会
 - [判定会とは](#)
 - [判定会委員名簿](#)
- 東海地域の観測体制
 - [地震・地殻変動の観測網](#)
 - [情報発表に用いる観測点](#)
 - [ひずみ計とは](#)
- [関連リンク\(リーフレット等\)](#)

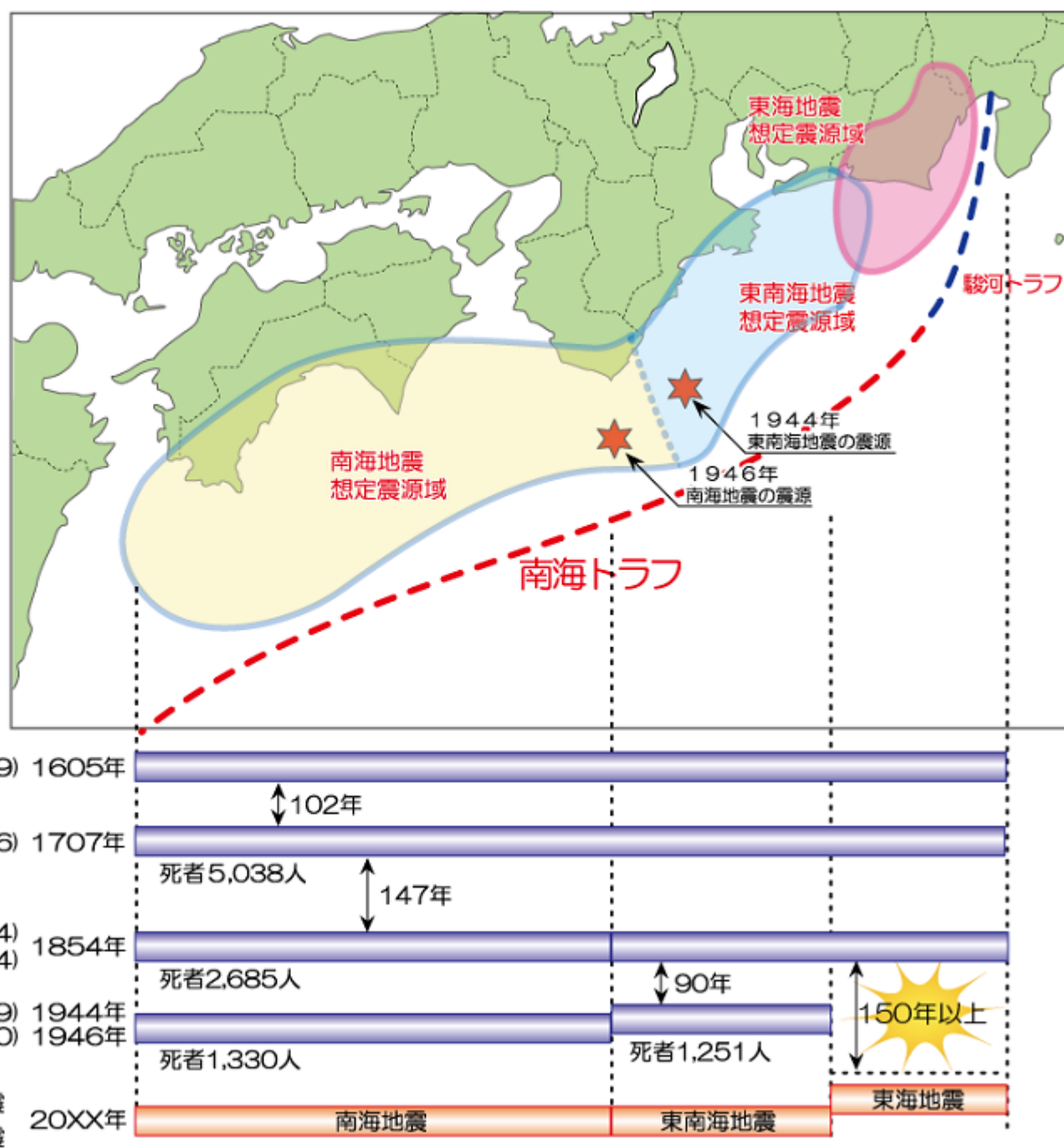


図1 南海トラフから駿河トラフに沿った領域で発生した過去の巨大地震の震源域

四国沖から和歌山県南方沖にかけて南海地震の震源域、三重県南東沖から遠州灘にかけて東南海地震の震源域、遠州灘から駿河湾内にある駿河トラフにかけて東海地震の震源域を想定している。

過去にこの地域で発生した大地震をみると、慶長地震(1605年)の102年後に宝永地震(1707年)が発生し、それからさらに147年後の1854年に安政東海地震、安政南海地震が発生している。それ以降、駿河トラフ周辺では大地震が発生おらず、150年以上が経過している。

掛川市

御前崎市



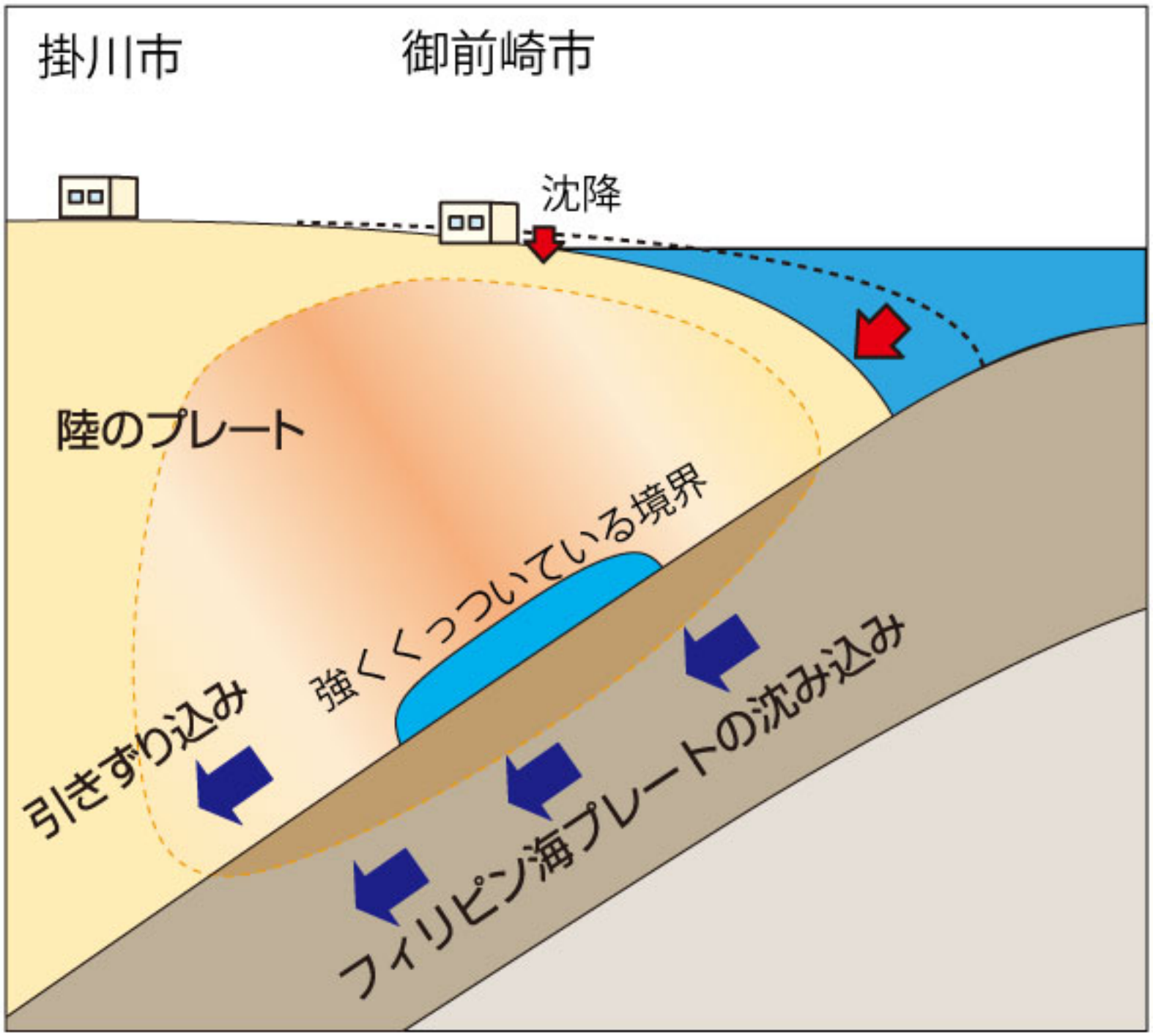
沈降

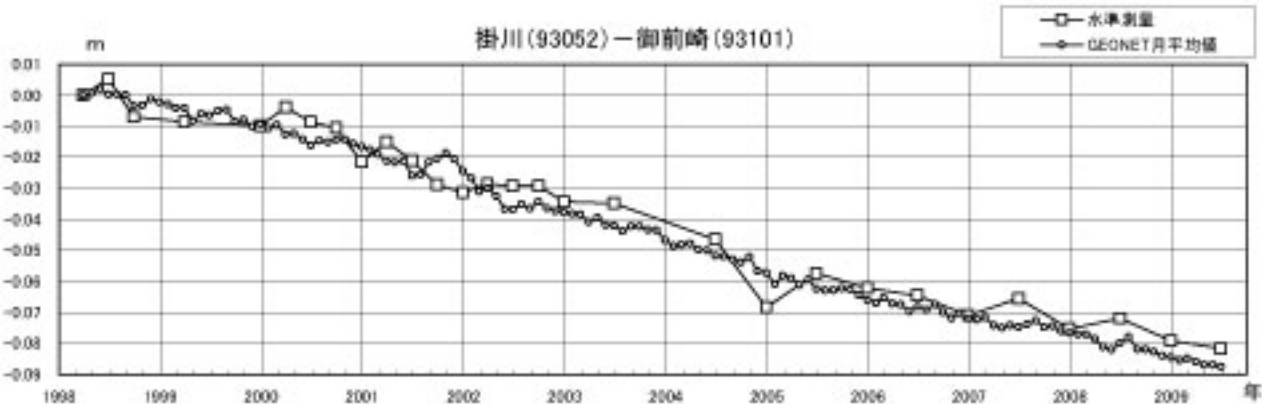
陸のプレート

強くくっついている境界

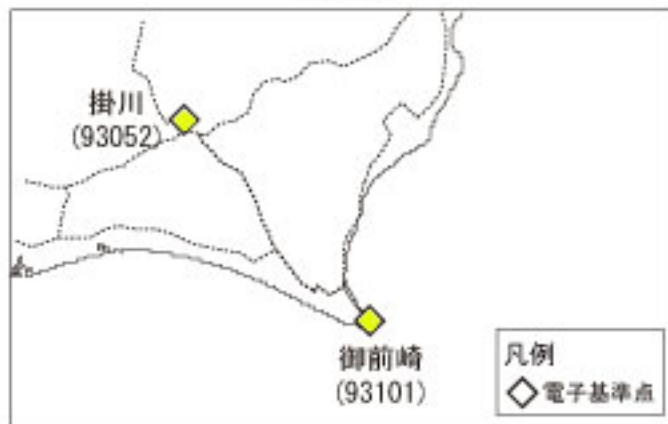
引きずり込み

フィリピン海プレートの沈み込み





位置図



国土地理院資料

(「平成21年8月31日
気象庁報道発表資料」
より引用)

巨大地震の起きる可能性

政府特別機関である地震調査研究推進本部によると、30年以内にマグニチュード8程度の大きな海溝型地震が起こる可能性は以下のように報告されています(平成17年3月)。



そして、私たちが考えなければならないのは、海溝型地震に伴って、都市の真下を震源とする直下型地震も必ず起きるということです。

1995年1月の兵庫県南部地震(M7.3、最大震度7)や2000年10月の鳥取県西部地震(M7.0、最大震度6強)、2004年10月の新潟県中越地震(M6.8、最大震度7)などがそれにあたり、活断層のひび割れによって起こります。